

甲状腺外科草子 107

インド洋を翔けた人類史：概説

杉野 圭三

インド共和国は 14 億人を超える世界第一位の人口と世界 7 位の面積の国土を持ち、世界経済を牽引する大国に発展しつつある。



しかし、残念ながら日本人のインドに対する知識は極めて貧弱である。

かたや、隣国の中国に対する知識は昔から「史記」、「論語」、「孫子」、「十八史略」、「三国志」、「水滸伝」など数多くの歴史書や大衆文学などの書籍において馴染み深いものとなっている。漢詩も平安時代から「和漢朗詠集」などは貴族の嗜みとされ、「源氏物語」や「枕草子」にも引用され、「李白」、「杜甫」などは大衆にも広く親しまれてきた。

インドは紀元前 3 千年紀のインダス文明からの歴史を持ち釈迦（シッダールタ）の生まれた地で、中国と同等の歴史や文学に対する知識があっても不思議ではない国である。

しかしながら、初期の統一国家マウリヤ朝、グプタ朝の形成、中世のデリー・スルターン朝、ヴィジャヤナガル王国、ムガル帝国の支配などに対する知識は乏しく、近世になってからも東インド会社、イギリスの植民地化、第二次大戦前後のガンジー、ネールによる独立運動などの大雑把なものでしかない。

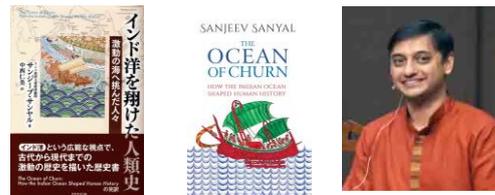
同じ、アジア地域ながら日本人にとって料理以外は馴染みや情報の少ない国でもある。

インドについて概説すると、民族はインド・ヨーロッパ語族、ドラヴィダ語族、オーストロアジア語族、モンゴロイド系のシナ・チベット語族に大別される。連邦公用語はヒンディー語、第二公用語は英語で、約 1 億人が使用、インドの大学講義は全て英語である。

宗教の割合はヒンドゥー教徒 79.8%、イスラム教徒 14.2%、キリスト教徒 2.3%、シク教徒 1.7%、仏教徒 0.7%、ジャイナ教徒 0.4%とされるが、近年イスラム教徒が増加している。

今後のインドとの交流を考えれば、歴史的背景、地理を含めた広い視点での知識が重要となるが、多民族・多宗教・多言語で理解困難な国家である。

最近、インド政権内での重要人物による歴史書が翻訳され、出版されたので紹介する。



インド洋を翔けた人類史 原著 サンジープ・サンヤル氏
The Ocean of Churn: How the Indian Ocean Shaped Human History, Sanjeev Sanyal 著。
日本語訳：インド洋を翔けた人類史、激動の海へ挑んだ人々、中西仁美訳（芙蓉書房出版）

著者はサンジープ・サンヤル(Sanjeev Sanyal)、1970 年生、デリー大学を経てオックスフォード大学留学、国際金融市場で勤務、ヨーロッパ最大手の銀行経営責任者に就任、2017 年にインド政府首席経済顧問、2022 年、モディ首相の経済諮問委員会に参画、G20 枠組み作業部会の共同議長を 5 年間務める。



オックスフォード大学 同ローズハウス

オックスフォード大ローズ奨学生に選出。
ローズ奨学生：オックスフォード大学院生に与えられる最古の国際的フェロウシップ制度、2 年間の奨学金、生活費が与えられる。選考基準は「聡明で協調精神のある、将来の良き市民たる能力を持つ」こと、毎年世界中から約 90 人の奨学生が選ばれ、ビル・クリントン大統領も奨学生の一人。

その他、2010 年世界経済フォーラムで「ヤング・グローバル・リーダーズ」に選ばれ、アイゼンハワー・フェロウシップも授与されたインドの秀才である。

本書は、インド国防大学の必読書だが、インドの地理・歴史的背景への基礎的知識が無いと一読では理解しにくい面もある。

しかし、インド政権内の要人が自国と東南アジア、中近東、中国、西欧などの歴史的関係を如何に考察しているかが判断できる貴重な資料である。様々な逸話、こぼれ話も面白く、笑える。インドの参考書、百科事典として活用可能。英語での理解困難だが日本語訳が出版され楽になったと喜ばれるであろう。参考資料：Wikipedia、

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2024 年 7 月 11 日